

談話標識 *well* の言い淀み：Praat による韻律分析

Discourse marker *well* as two types of hesitation :
a prosodic analysis by Praat

高村 遼
Ryo TAKAMURA

はじめに

談話標識 (discourse markers) は、Deborah Schiffrin (1987a) による *Discourse Markers* が出版されて以来、語用論や談話研究をはじめ第二言語習得の分野でも盛んに研究されている (Cf. Fung and Carter 2007)。談話標識については、様々な定義がなされ、「語用論標識 (pragmatic markers)」と呼ばれることもある。

談話標識は、のちに概観するように、とりわけ、話しことばに顕著な言語形式である。しかしながら、話しことばに伴う談話標識の韻律的側面について触れられた研究が増えつつあるのは近年のことである。本稿では、談話標識 *well* の語用論的機能と韻律的側面の関係について論じる。

Svartvik (1980: 172) は、談話標識の機能とそのイントネーションの関係が必ず一致しているかは不明であると結論づけている。本研究で扱ったデータでは、言い淀み (hesitation) の場合に2つの異なる韻律がPraatによって明らかになった。話している際に、次に何を言うかに迷い、スムーズに言語を産出できないことを一般に「言い淀み」とみなすが、実際には、言い淀みは「好まれない応答形式 (1)」と「フィラー (2)」の場合に区別することができる。前者は、上昇調のイントネーションがかかり、後者は、下降調のイントネーションであることが本データでは確認できた。

まず1節では、談話標識の定義とその判断基準を概観し、2節では、談話標識 *well* が、従来の副詞や形容詞用法の *well* とは、異なることを確認したい。3節では、談話標識の文法化について触れる。4節では、談話標識と韻律について、5節では、フィラーとしての *well* について論じる。6節は実際にデータ分析を行い、Praat による結果を提示する。

1 定義と判断基準

1.1 談話標識

Schiffrin は、著書 *Discourse Markers* の中で、それまで品詞としてはさまざまに分類されてきた *oh* (感動詞)、*well, now, then* (副詞)、*and, but, or* (論理的接続表現)、*so, because* (因果に関わる接続表現)、*y'know, I mean* (挿入句) (高田・椎名・小野寺 2011: 29) を談話標識という一つのカテゴリーに初めてまとめあげた。

しかし、先に述べたように談話標識の研究が扱う言語形式は多様になり、「何を談話標識とみなすか」を含め盛んに議論されており、見解は統一していない。とりわけ、英語の *well* については、副詞 (adverb)、間投詞 (interjection)、フィラー (filler)、不変化詞 (particle)、言い淀み (hesitator)、開始の合図 (initiator) とラベルづけがなされてきた (Svartvik 1980: 168)。

Schiffrin は談話標識について、二つの定義をあげている。一つは作業上の定義で、「連鎖する会話の流れの中で、会話を括弧でくくる要素」(1987a: 31) である。談話の意味は、談話という連鎖的流れの中で産出され、また解釈されるが、談話標識はその流れの中で「話の単位の境界に立って、その括弧づけした中身をどのように理解するべきか」という枠組みを提供するもの (Ibid.: 36) だとする。談話標識は、その名の通り、談話の中で見るべきものである。談話のみならず社会構造において「括弧づけ (bracketing)」とは、社会学の E. Goffman (1974) の bracket に由来するものである。

そして、もう一つが理論上の定義である。談話標識は「コンテキスト座標」であり (Ibid.: 326)、談話標識が先導する発話がそこで産出され、また解釈されるべきコンテキストを指し示すものだとしている。さらに、そのコンテキストは「参加者座標」と「テキスト座標」に分かれる。当該の標識が先頭に立って導く発話が、「話し手・聞き手のどちらにより関わる (参加者座標)」のか、また「前述・後述のテキストのどちらにより関わる (テキスト座標)」のかを知らせる役割を果たす。

本稿は基本的に Schiffrin の定義を支持する。ただし、談話標識の判断基準に関してはより包括的に記述している Brinton (2017: 9) に依拠する。Brinton は談話標識が共通して有する性質について 12 項目を挙げている。Brinton はそれらの性質を大きく、音韻と語彙、統語的な場所、意味論的な意味、機能、社会言語学と文体の 5 つの観点から判断できると論じている。

・音韻と語彙的な性質

(a) 談話標識は、たいてい「短い」言語形式であるが、句 (phrasal) や節 (clausal) も該当する。それらは音韻的に縮小していることがある。

(b) 談話標識は、独立した音の調子がかかることもあれば、前後の語彙と音調が結合されることもある。

(c) 談話標識は、従来の品詞 (word class) とは異なるものの、副詞、接続詞 (conjunction)、間投詞とは、大いに関係がある。

・統語的な場所

(d) 談話標識は、統語的構造の外側に出現するか、統語的構造に付着する。

(e) 談話標識は、節の境界線 (はじめと終わり) に優先的に出現するが、文中 (sentence-medial) にも現れる。

(f) 談話標識は、文法上強制されるものではないが、重要な語用論的な機能を果たしている (ある意味では語用論的には必要なものである)。

・意味論的な意味

(g) 談話標識は、命題および概念的意味は持っていないが、手続き的で非合成的 (non-compositional) である。

・機能

(h) 談話標識は、しばし、多機能 (multifunctional) で、様々な語用論的な機能を持っている。

・社会言語学および文体的性質

(i) 談話標識は、書きことばよりも話しことばに特有なものである。話しことばと書きことばにおける談話標識は形式と機能が異なる場合がある。

(j) 談話標識は、話しことばにおいて、頻繁に使われ、顕著な存在である。

(k) 談話標識は、とりわけ書きことばや正式な談話においては文体論的に蔑まされ、否定的に評価される。

(l) 談話標識は、男性と女性によって機能や頻度が異なる場合がある。

(Ibid.: 9 [筆者訳])

以上の基準に基づき、次節で、実際に *well* が談話標識とみなされる例を確認する。

2 統語的な意味の *well* と談話標識 *well*

先の Brinton (2017: 9) の基準 (c) によれば、談話標識 *well* は、形容詞および副詞 *well* との間には関係性が見られると示唆している。現在でも談話標識 *well* と共存する形で形容詞と副詞として *well* は使用されている。まず、*well* が従来どのように統語論や意味論で分析されてきたかをここで確認したい。

Greenbaum (1969: 3) は、“David plays chess very well” における副詞 *well* を次の二点

について観察している。

(1) 補語 (complement) の後に現れうること

(2) *very* を前置修飾語 (premodifier) として受けられること

さらに、Greenbaum は、*well* を肯定的な (positive) 特徴と否定的な (negative) 特徴に区別し、*well* が果たしうる役割の可否についてそれぞれ述べている (Ibid.: 3)。

肯定的な *well* の潜在的特徴

(3) *How* からはじまる疑問文に対する答えとして機能できること : *How does David play chess? (Very) well.*

(4) 相関関係を比較する *as...as* の焦点になりうること : *David plays chess as well as William does.*

否定的な *well* の潜在的特徴

(5) 文のあらゆる場所に動くことはできない。対照的に、例えば *usually* は複数の場所を占めることができる :

(a) *Usually* David plays chess.

(b) David *usually* plays chess.

(c) David plays chess *usually*.

(6) 動詞 (verb) - 主語 (subject) の倒置において、文頭の *only* の焦点になりえないこと :

* *Only well* does David play chess.

この点に関しては、例えば *occasionally* の場合とは対照的である。それゆえ、*David plays chess occasionally* における *occasionally* は、*Only occasionally* does David play chess となりえる。

先の否定的な潜在的特徴 (5) で見たように、あらゆる場所には動けないと論じているものの、*well* が機能する場所はいくつかある。Greenbaum は、*David plays chess very well* における *well* の統語的に移動できる場所として次の三つの異なる機能を挙げている。

- (7) *Well*, David may play chess.
- (8) David may *well* play chess.
- (9) David may play chess *well*.

(Ibid.: 4)

Greenbaum はまず、(7) から (9) をそれぞれ、*well*₁、*well*₂、*well*₃ とラベルづけをした。*well*₁ と *well*₃ はいかなる動詞と組み合わせ可能だが、*well*₂ の場合は当てはまらないと考察している。それゆえ、*Well*, David plays chess と David plays chess *well* は許容できるが、*David *well* plays chess は不可である。*Well*₂ は *may* や *might* といった特定の助動詞を伴う必要がある。*Well*₃ は、*how* ではじまる疑問文の応答として機能している：How did David play chess? *Well*. ただし、*well*₁ と *well*₂ は当てはまらない。最後に、*well*₁ と *well*₂ はいかなる本動詞 (main verb) と結びつく一方で、結局は、*well*₃ はある種の動詞に制限されると指摘している。

おそらく、Greenbaum は、統語上は、副詞としての *well* はいかなる動詞とも共起できると考えたが、意味の上では、動詞との相性によっては *well* と共起できないと考え直した。そのため、矛盾に思われるが、結局のところ、*well*₃ は、あらゆる動詞と用いられることはないことに留意する。

次の (10) と (11) は許容されるが、(12) は不適切である。

- (10) *Well*, David may be the leader.
- (11) David may *well* be the leader.
- (12) *David may be the leader *well*.

(Ibid.: 5)

したがって、*well*₁ は命題内容に寄与せず、文のはじめに出現することから談話標識であると確認できる。Brinton の談話標識としての判断条件 (e) が示すように、*well* は、発話（あるいは文）のはじめに好まれて使用される傾向が強い。談話標識は発話のはじめ、中間、そして終わりに出現することも報告されているが、研究初期において Schifffrin (1987: 328) は「発話頭でよく用いられる」ことを談話標識と判断する主たる条件としてあげている。つまり、談話標識としての *well* は、節内副詞として使われていた *well* とは性質が異なる。Greenbaum の例 (5) で見たように、*usually* は文のどこに移動しても頻度を表す副詞としての意味に変化はなかったが、*well* は特に発話頭であれば、副詞ではなく談話標識とみなされる。

3 談話標識の文法化

従来、節内副詞として使われていた *well* がその出現位置を改め、発話頭で談話標識として機能するようになった発達現象を文法化 (grammaticalization) と捉えることができる。文法化の初期の研究では、Meillet (1912 [1921]) は ‘l’attribution du caractère grammatical à un mot jadis autonome’ (以前は自立語であった語に文法的性格が付与されること) と定義づけた。

Traugott (2010) によれば、文法化には二つの考え方があり、Meillet のような考え方を「従来の文法化」とし、副詞から談話標識への変遷を「拡大する文法化」と捉える (より詳細な文法化の二つの立場についての議論は、小野寺 2014: 11-16、Traugott 2010、Traugott 2011: 59-64 を参照)。前者は、狭い、あるいは伝統的な文法化と考えられ、構造や形態の縮小、および、依存性の増加を示す。後者は、それに対し、文の内部 (sentence-internal) から文の外部 (sentence-external) へと作用域を広げる性格をもつ。Traugott (2011) は、文法化の二つの考え方について次のように述べている。

文法化とは、文法的要素が (史的に) 発達して、関連する一連の機能的・語用論的・意味的・形態統語的・音韻的変化が生じることと捉えることができる。最近では、この発達に関して、主に 2 つの異なる考え方がある。ひとつは、発達によって縮小 (reduction) が起こるという考え方で、これは「伝統的」または「狭い」見方と一般的に言われている。もうひとつは、発達によって拡張 (extension) が起こるという考え方である。これらの 2 つの考え方は相補的である。なぜなら、前者は形式がどのように発達したかについて答え、後者はどのような機能変化が起こるかについて答えるといったぐあいに、それぞれ個別の問いかけに対する答えとなるからである。縮小するという見方と拡張する見方の違いは、「文法」に関する理解の違いにもよっている。つまり、前者の場合、語用論は核となる文法には含まれないと考えられ、後者の場合、語用論は文法の一部であると考えられる。

(Traugott [福元訳] 2011: 59-60)

Traugott (1995) は、拡大する文法化の例として、13 世紀までは名詞だった *indeed* (行為) が、14 世紀には *in dede* と副詞句へと変化し、16 世紀には文副詞、そして 17 世紀になると談話標識として使用されていることを指摘している (Ibid.: 7-9)。このことから、Traugott は拡大する文法化の一つの傾向として、「節内副詞 → 文副詞 → 談話詞」の変遷を提示している (Ibid.: 1)。

一方で、談話標識の成立を「文法」化と捉えることに抵抗を示す研究は少なくない (Cf. Heine 2013)。しかし、Fraser (1988: 32) が「談話標識はことばという文法の一部である」と述べているように、「文法」をどのように捉えるかの解釈の違いによるものである。

ただし、*well* は文副詞としての用法はないことから、談話標識への発達が Traugott の示す一連のプロセスに適するかは議論がなされている (Cf. Defour and Simone-Vandenberg 2010)。さらに、談話標識 *well* が形容詞由来である可能性も指摘されている (Finell 1989)。本稿ではこれ以上の議論には立ち入らないが、従来の統語的機能と談話標識としての *well* の関係は明らかになった。

4 談話標識と韻律

談話標識を分析する際に、韻律的側面に言及する研究は少なくないが (Cf. Jucker 1997; Schiffrin 1985)、実際に Praat などを使って分析している研究は未だに多くない (Cf. Sohn and Kim 2014)。実際、Wichmann et al. (2010: 111) は、「(談話標識の) 意味がとても抽象的なので、韻律と語彙の一对一関係はない」と指摘している。また、談話標識 *well* の韻律を調査した Svartvik (1980: 172) も、「韻律と意味の間に特徴的な相関関係はない」と結論づけている。

一方で、Schiffrin (1987b: 28) は、談話標識を Gumperz (1982) の「コンテキスト化の合図」(contextualization cue) との可能性に注目している。Schiffrin は、友人に 800 ドルで非常勤講師を依頼された際に、「For \$800, I'd teach a course in social problems. (800 ドルで、社会問題講座を教えたいわ)」と返答すると友人に「Yeh, that's good money. (ねえ、いい給料だものね)」と言われ、困惑したという。Schiffrin はあまりの金額の低さに引き受けられない、と意図したつもりが、「快諾」と誤解されたのだ。Schiffrin は、文全体を上昇調に述べたことで誤解が生じたとし、下降調で言うべきだったと、その典型的な韻律曲線を示している (Ibid.: 29)。つまり、イントネーションによって意味が変わることを指摘している。

本稿で扱う、言い澁みは、上昇調と下降調で大きく判別することができ、またそれぞれの機能も区別することができた。談話標識にとってイントネーションの意義は、まず統語的範疇の語彙と区別されることにある。先に見た副詞としての *well* は、文に組み込まれ、文の一連のイントネーションに影響される。しかし、談話標識の場合、一般に、後続する文とは、独立した韻律曲線がかかることが報告されている (Brinton 2017: 9; Schiffrin 1987a: 328)。

5 フィラー

Well は談話標識の代表格でもある一方で、またフィラーという別の機能としても使用されている。英語教育の分野では、Dörnyei and Thurrell (1992: 44) がコミュニケーション・ストラテジーの一つとしてフィラーが重要であるとし、*well* はその例としてあげられている。この背景には、Chomsky (1965: 3) が、フィラーや談話標識など話しことばに見られる特有の言語形式を、「言語知識を実際に運用する際の誤り」と考えたことに基づいている。Chafe (1985) は、こうした理想の話し手と聞き手のみを対象とした言語理論では扱われなかったフィラーに関し、「話すことは言語形式として頭にすでに蓄えられている材料を吐き出すことではなく、メディア、思想、言語に関わる創造的な行為である」と指摘した (Ibid.: 170)。

Clark and Fox Tree (2002: 90) は、英語フィラーの *uh* と *um* が使用されるとき、主として次の 5 つの解釈ができるとしている。

- (a) 話し手は現在、(談話の) 構想面で問題に直面している
- (b) 話し手は、ことば (a word) を思い出そうとしている
- (c) 話し手は何かについて言い淀んでいる
- (d) 話し手は何かについて疑いを持っている、または不確かだと感じている
- (e) 話し手はまだ「話しの産出に関わっている」(engage in speech-productive labor) (Goffman 1981)

(Ibid.: 90 [筆者訳])

上の (a) から (e) の特徴は *well* の場合にも、おおよそ当てはまるものと推測している。ただし、*well* は語彙化されたフィラー (Fox 2010: 1) で、副詞や形容詞に由来するものと考えられることから、*uh* や *um* と性質が異なるのだろうが、これらにおける機能の差異は本稿では議論しない。

フィラーとしての *well* は談話標識の場合とは異なり、語と語あるいは発話と発話の間を埋める極めて局所的な作用域でしか機能しない。例えば、「犬」の話をしていて、「猫」の話に移る際、話題転換を示す *well* は、語や発話よりも「話題」という前述、並びに後述の内容を含む大きい単位を指し示すことができる。一方で、フィラーはその名のごとく、後続する発話を思考している間や産出するまでの間を埋めるのみである。そのため、フィラーの統語的な制約については談話標識に比べると議論があまりなされていない。

したがって、談話標識とフィラーとしての *well* は、共に同じ言語形式であるが、機能の点では異なることがわかった。次節では、それぞれの具体的な例を検討していく。本稿では

これ以上扱わないが、談話標識とフィラーの *well* は言語的に連続した関係にあるのか、それとも同綴意義語なのかは議論が今後必要である。

6 データ分析

本論がデータとして用いるのは、映画 *Four Weddings and a Funeral* (以降は FW と略) である。まず、映画をデータにするにあたっては、いくつかの利点が挙げられる。映画に出演する定評のある役者は、視聴者がわかるような演技や発話の産出を心がけている。つまり、映画を見ている人は、その内容や状況を明解に理解している。また、音声や身振りといった非言語的側面の情報も得られるのは、分析には有益である。こうしたことから、映画から得られる談話標識の機能をより正確に、判断することが可能である。さらに、*well* の発話にかかった秒数や韻律曲線は音声解析ソフト Praat による分析を行った。Praat 分析を行う際には、できる限り雑音や不明瞭な音声を避ける必要がある。したがって、映画の場合、自然発話の状況と異なり、録音上の雑音などが少なく、より正確な韻律曲線が得られる。Praat の結果は図 1・2 に韻律別にそれぞれにまとめた。なお、各例の右下には FW における会話の始まりの時間を示している。スクリプト中の () は、話者がポーズにかかる秒数を示している。

はじめに見たように、談話標識 *well* の代表的な機能として、躊躇あるいは言い澁みがある。しかし実際、言い澁みは *well* 単体で示されるものではなく、前後の産出状況を含めて一連の言語現象として判断されうるものである。次では、言い澁みとしての *well* の韻律の二つのパターンを Praat によって明らかにする。一つ目は下降調パターン (6.1)、そして二つ目は上昇調パターン (6.2) である。

6.1 下降調パターン

Levinson (1983) は、好まれない応答形式には次のような特徴が観察できるとまとめている。

- (a) 遅れ：
 - (i) 話し始める前の休止による。
 - (ii) 前置きの使用 ((b) 参照) による。
 - (iii) 修復誘発手段とか挿入連鎖を使用し、多数の話者交代を通じて達成される置換えによる。
- (b) 前置き：
 - (i) 好ましくない応答を示す、Uh や Well といった標識の使用。
 - (ii) 不一致の前の名ばかりの一致の提示。

- (iii) 適切であると思われる場合の感謝の使用（申し出、誘い、提案、勧告に対して）
 - (iv) 適切であると思われる場合の陳謝の使用（依頼、誘い、などに対して）
 - (v) 条件表現の使用（例えば、I don't know for sure, but…（よくわかんないけど…）など）
 - (vi) 様々な形態をとるためらい、自己訂正を含む。
- (c) 説明： なぜその（好ましくない）行為がなされているのかについての注意深く系統だった説明。
- (d) 拒否部分：隣接ペアの第一部分の要求に応じた形をもち、特徴としては、間接的で、緩和されている。

(Ibid.: 334-345；日本語訳は安井・奥田（1990）を参照）

次の例 (13) は、主人公イギリス人の Charles が友人らとともに招かれた結婚式場でのやりとりである。Carrie はアメリカ人女性で、二人は当日の結婚式で初めて出会った。

- (13) 1 Carrie: Hi.
 2 Charles: (2.2) [飲み物を飲もうとしている] Hi, hi, I thought you'd gone.
 3 Carrie: No, not yet. I was just wondering where you were staying tonight.
 → 4 Charles: (1.7) Uh, (0.4) well (1.2) uh
 5 I was staying at some pub called The Lucky,
 6 The Boat or something like that.
 7 Carrie: Boatman.

(FW: 23min 29sec)

3 行目で Carrie がこの晩どこに泊まるのかを尋ねていることからわかるように、Carrie は Charles に対して好意を寄せている。4 行目で Charles はすぐに返答せず、1.7 秒のポーズ、フィラー（filler）uh、さらに 0.4 秒のポーズを置いた後に well、1.2 秒のポーズと uh が続いている。Levinson が示す、好まれない応答形式の典型である、(a) 遅れと (b) 前置きが、四角で囲んだ部分で見られる。5 と 6 行目において、Charles の状況の説明と間接的に、一緒に泊まることができない拒否が見られる。

(13) の会話中には出てきてないが、Charles は当初、The Boatman という宿所に泊まる予定であったが、このやりとりの前にすでに友人宅に夜は招かれていた。3 行目の Carrie の質問に対して、Charles は Carrie が宿泊する場所には泊まらない。あるいは、一緒に泊

まることができない、つまり、相手の期待には応えられないことを示している。このように、期待された応答ではない応答を「好まれない応答形式 (dispreferred response)」とエスノメソドロジーでは分析される (Sacks 1987 [1973])。次に示す例もまた、好まれない応答形式の例である。

(14) は、Charles が不本意の結婚をする状況での会話である。1 行目で友人の Matt に自分たち (Charles と Henrietta) の結婚について尋ねている。

- (14) 1 Charles: Ahm, Matt, what do we uh think about marriage?
 2 Matt: [sigh] Ahm, gosh. Well, I think it's really good.
 3 Charles: Um.
 4 Matt: If you love the person with all your heart.
 → 5 Charles: (1.7) Well ex, exactly. (1.3)
 6 Quite.

(FW: 1h 43m 14sec)

この会話の背景として、Charles は本命の Carrie が別の男性と結婚してしまったこともあり、本当に愛しているかわからない元恋人 Henrietta と結婚することになる。Henrietta との結婚を不本意と感じている Charles は、Matt に対して、形式的には賛同しているものの、心情には反している (つまり、愛してない)。そのため、1.7 秒のポーズによる遅れ、*well* による前置き、*exactly* の言い直し、1.3 秒のポーズがある。

(14) は、4 行目の Matt の質問に対して、「愛している」か「愛していない」の二択の対になる応答が予期される。一般に、前者が、好まれる応答、後者が、好まれない応答になる。しかしながら、先の (13) では、「どこに泊まるのか」という *wh* 質問は、必ずしも対になる応答があるわけではない。Schegloff and Lerner (2009) は、*wh* 質問に対する応答の前置きになる *well* を「non-straightforwardness」(非直行的) と特徴付け、「答えが直行的に言えず、答えを言うまでに説明 (story) を話す必要がある」(Ibid.: 102) と述べている。ただし、(13) の Carrie による質問は、「誘い」という行為に捉えることができるので、「好まれない応答形式」と分析した。

次の例 (15) は、Charles の友人であり、恋愛関係にもあった Carrie と Hamish の結婚式の祝いの品を買いにきた店での会話である。Charles が入店しても店員 (clerk) は挨拶もせず、リストを書き続けている。一般に、店員と顧客の関係は、顧客側に力があると考えられるが、ここではその関係が逆転している。Charles が高級ブティックにはそぐわないアロハシャツと半ズボンで入店したことから、店員は接客に値しないと考えたのである。5 行目では経済力のなさが証明され、9 から 11 行目においては、嫌味を言われている。12 行目の

well は今までのやりとりに圧倒され、言い直しもある。そして、「(買うのを) 諦める (leave it)」と購入の拒否をする。

- (15) 1 Charles: Ah, excuse me. (1.2) Sorry to interrupt.
 2 Do you have the wedding list for Banks?
 3 Clerk: Certainly, sir [リストを机に置く].
 4 Lots of beautiful things for around about the 1,000 mark.
 5 Charles: (1.4) Uh Hun (1.0) What about (0.2) things around (0.2) the sort of
 6 (0.5) 50 mark? Is there much?
 7 Clerk: Well, you could get that Pygmy warrior over there.
 8 Charles: (2.0) This? Excellent! [laugh]
 9 Clerk: = If you could find someone to chip in the other £3950.
 10 Or our carrier bags are 1.50 each. Why don't you just get 33 of
 11 them?
 → 12 Charles: (3.0) Well, I, I think I'll probably leave it.
 13 Thank you very much. You've been very...

(FW: 59min 31sec)

10 から 11 行目と 12 行目は、一つ 1.5£ のショッピングバッグ 33 個買うことへの「提案」とそれに対する「断り」の隣接応答ペア (adjacency pair) になっている (Schegloff and Sacks 1973)。12 行目の第二ペア部分が、3.0 秒の遅れと、*well* による前置きを含む好まれない応答形式である。ただし、先に述べたように、9 から 11 行目にかけては、店員による「揶揄」であり、本気で購買を勧めているかは定かでない。一般に、店員にとって、顧客が「購入する」ことが好まれる応答になるが、このやりとりでは、顧客が「購入できない」ことが前提とされている。

12 行目の Charles の発話が、言語形式上は「好まれない応答」であるとしても、店員が Charles の発話を「好まれない応答」として捉えるかは議論の余地がある。のちの考察で検討することにする。

談話標識 *well* は、好まれない応答形式に特徴的な言語形態であることは広く認識されている (Cf. Bilmes 1988; Heritage 2018; Owen 1983; Pomerantz 1984)。これまで見た例 (13)(14)(15) に出現した *well* は、Levinson があげた特徴を満たし、いずれも好まれない応答が後続することを合図していることが観察できる。

次に、Praat による分析の結果を表 1 に示す。本来は、f0 (fundamental frequency) 曲線は青色で、dB 曲線は緑色で出力される。しかし、本稿はモノクロ印刷のため、いわゆる

イントネーションを表す f_0 曲線のみを矢印 (←) で示すことにする。好まれない応答形式を先導する談話標識 *well* (13)(14)(15) は、FW においては、いずれの曲線も下降している。例 (13) は、やや上昇してから下降しているものの、全体的には下降調である。

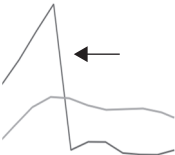
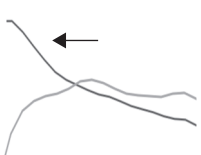
例		(13)	(14)	(15)
韻律				
産出秒数		0.22	0.10	0.31
Pitch (Hz)	平均	120	105	106
	最低	88	95	96
	最高	199	149	149
DB (dB)	平均	74	72	72
	最低	67	69	69
	最高	77	73	73

表 1 言い澁みの *well* の韻律曲線

6.2 上昇調パターン

次の例 (16) は、Charles の友人 Fiona と結婚式会場で出会った聖職者の見習い Gerald の会話である。二人は当日の式で初めて知り合い、お互いのことはよく知らない。

- (16) 1 Fiona: My name's Fiona.
 2 Gerald: I, I'm Gerald.
 3 Fiona: (1.6) What do you do?
 4 Gerald: (1.5) I'm training to be a priest.
 5 Fiona: Good Lord! (2.0) Do you do weddings?
 6 Gerald: No, not yet. I will, of course. Jolly nerve-racking.
 7 Fiona: Yes, rather like the first time one has sex.

→ 8 Gerald: (1.0) Uhm (1.6) well, well, I suppose so.

9 Fiona: Though rather less messy, of course and far less call for condoms.

10 Gerald: [Embarrassed] Aaahm.

(FW: 14min 47sec)

1～4行目で自己紹介をしていることからわかるように、初めて会話している場面である。7行目で Fiona が「初めて結婚式を行うことは、初性体験のようである」と風刺する。その内容があまりにも唐突なために、8行目で Gerald はスムーズに答えられず、ポーズとフィラー (filler) が見られる。Well は2つ産出されているが、最初の well は完全に産出されず、言い直している¹。

7行目と8行目は、「質問」と「応答」の隣接応答ペアである。Gerald は Fiona の命題内容に対して、「I suppose so.」と度合いの低い同意を示している。Fiona は当然、Gerald が聖職者の見習いであることを知り、7行目を発話しているので揶揄いである。つまり、聖職者は、一般的に性体験はないものと仮定されるので、8行目の Gerald の同意は Fiona によって必ずしも求められていたわけではない。しかし、Gerald は「結婚式を執り行うこと」と、「性体験」の2つには神経がすり減る (nerve-racking) ことが共通していると考えたすえに、「I suppose so.」と産出したのである。それゆえ、8行目の well は後続発話を産出するまでのフィラーである。

次の例 (17) は友人であり、恋愛関係にもあった Carrie に誘われて、Charles は一緒に結婚式のドレスを選ぶ状況である。露出が過度なドレスを着て出てきた Carrie を見た Charles は動揺している。

(17) 1 Carrie: It's a bit sexy, this.

→ 2 Charles: (0.7) [laugh] Well (2.0), if I were your husband, I would die of pride.

(FW: 1h 1m 40sec)

Charles は2行目で、0.7秒のポーズを置いて、笑い、well を発したあとも2秒のポーズをとり、どのように Carrie のドレス姿を描写すべきか戸惑っている。したがって、2行目の well は、後続発話を考え、発話するまでのフィラーである。

次の例 (18) は、友人 Tom の家に向かう途中、Charles は急遽、Carrie が泊まるパブに行くことにする場面である。3行目の Tom の質問に対して、Charles は、どう答えるか戸惑っている。何故ならば、7行目の発言内容は嘘であり、実際には意中の Carrie に会いに行く

¹ 表2は2つ目の well の音声进行分析している。

ためである。

- (18) 1 Charles: Tom, can you stop the car? Stop the car.
 2 (2.5) Sorry, sorry, I just think I might stay in that pub after all.
 3 Tom: (0.6) Why on earth?
 4 [Scarlett がサイレンのモノマネをしている (0.3)]
 → 5 Charles: Uhm [clears his throat] (0.5) *well* (0.7) uh (7.4)
 6 [ポーズの間、Scarlett と Tom はサイレンのモノマネをする]
 7 Charles: No, seriously. I'm doing some research into pubs with the word 'boat'
 8 in the title.

(FW: 25m 48sec)

5 行目で Charles がどのように答えるべきか言い淀んでいると、答えを急かすように車中にある Tom と Scarlett がサイレンのモノマネを始める。したがって、7 行目を発するまでのフィラーであると考えられる。

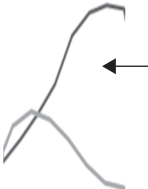
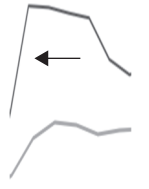
例		(16)	(17)	(18)
韻律				
産出秒数		0.09	0.15	0.07
Pitch (Hz)	平均	132	131	155
	最低	53	73	127
	最高	162	146	168
DB (dB)	平均	75	79	74
	最低	61	73	71
	最高	78	81	76

表2 フィラーの *well* の韻律曲線

いずれの例も上昇し語末は下降している。また、好まれない応答形式の場合よりも、全体的

に *well* が、短く産出されている。

次の表 3 は、例 (13) から (18) の *well* の前後の情報と例の本文で四角く囲った一連の言い淀みにかかった合計秒数をまとめたものである。例 (13) は、*well* の前後にポーズとフィラー *uh* が現れている。Clark and Fox Tree (2002: 79) は、*uh* はちょっとした遅延 (minor delay) を伝達すると指摘している。とりわけ、(15) の *well* は、後続する “I” の音と結合し、間髪あげずに発話が続いている。これら「好まれない応答形式」を表す例は、話者が、後続する発話が「好まれない応答」で、意図的に遅延をしているために、*well* と後続するメッセージの間に、ポーズが置かれなければならない場合があることを示している。例えば、映画に誘われて断る場合、断ることはその内容を音声化する前に決まっており、対人的な理由から、メッセージの前にあえて遅延を挟むことで断りを含意している。一方で、「フィラー」は現在、何を、どのように言うかを考慮しているために、*well* の後続はポーズや別のフィラーが後続する場合があります、本データの中では、フィラーの *well* が、後続する発話部分と結合することはなかった。

例	前	<i>well</i> (秒数)	後	合計秒数
(13)	(1.7) Uh (0.4)	0.22	(1.2) uh	4.25
(14)	(1.7)	0.10	ex, exactly (1.3)	4.33
(15)	(3.0)	0.31	I	3.49
(16)	(1.0) Uhm (1.6) well	0.09	I suppose so	3.86
(17)	(0.7) [laugh]	0.15	(2.0) if...	4.12
(18)	(0.3) Uhm [...] (0.5)	0.07	(0.7) uh (7.4) No...	10.58

表 3 例 (13) から (17) における *well* の前後のポーズ・言語情報

7 考察

談話標識 *well* は、言い淀み (hesitation) の標識の代表格であるが、実際の談話上の機能は、好まれない応答を先導する場合と、話者が後続の発話を産出するにいたるまでのフィラーの場合の二つに区別できることが確認できた。この二つの機能を決定する際の一つの手がかりとして、本稿では韻律特徴を中心に考察した。結果的に、本データにおいては、好まれない応答 (1) の場合には、下降調の韻律曲線を示し、フィラー (2) の場合は、上昇→下降調の韻律曲線を示す傾向にあることが明らかになった。

しかしながら、例 (15) では、店員が、兵士の置物の購入の「提案」をし、それを Charles が「拒否」という隣接応答ペアが成立しているものの、店員が Charles に対して、本気で購入を勧めているとは考えられない。それよりもむしろ、店員は Charles の経済的な余

裕がないことを理解しているので、揶揄している。したがって、この場合の *well* は、「好まれない応答」であるとは言い難く、むしろ「フィラー」とも解釈できる。結果的には、両者は「言い澁み」であるものの、韻律曲線のみで談話標識の機能を決定づけることは困難である。例えば、本研究と同じデータを用いた Takamura (2019) によれば、「表現の修正」の際の 3 例全ての *well* も下降調の韻律であった。つまり、イントネーションのパターンには限りがあるため、多義性を持つ談話標識の機能それぞれに独立したイントネーションがかかるとは考え難く、結果的に Svartvik らの見解と似通う。談話標識の韻律特徴を考察する際には、音の高低を示すピッチの幅をはじめ、談話標識の産出にかかった秒数とその前後のポーズ情報にも注意を払う必要がある。実際、好まれない応答を示す *well* の平均産出秒数は、0.21 秒で、同じ下降調の表現の修正をする *well* の平均産出秒数は 0.12 秒であった。同じように、上昇調であっても、短く発音するか長く発音するかで意味は異なるためである。やはり、談話標識を分析する際には、今まで述べた韻律情報に加え、どのようなコンテキストで、どのような親疎関係でその談話標識が使われているのかを考慮し、それぞれの談話標識を個別に分析することが重要だということがわかった。

8 まとめ

談話標識 *well* は、「言い澁み」(hesitation) のマーカーとして認識されてきたが、言い澁みとは、好まれない応答形式の前置きによる *well* と、次に言うことが決まるまでの間を埋めるフィラーとしての *well* の上位カテゴリーの総称であると言える。こうした識別は、文字化されたトランスクリプトだけでは難しい場合があるため、実際の音声データも分析の手がかりとして活用していく必要があるだろう。さらに、話者が談話標識 *well* を産出にかかる秒数、前後のポーズ状況も機能を決定する重要な手がかりであることも改めて確認できた。

Schiffrin (1987b) が指摘しているように、一般的に、下降調のイントネーションは、消極的な印象を与える。好まれない応答形式を前置きする談話標識 *well* も、下降調の韻律曲線がかかることで、聞き手に後続部分が相手の期待に応えられない、消極的な印象を与えている部分で共通している。ただし、それは下降調イントネーション自体が普遍して示す意味であるのかは慎重になる必要がある。しかしながら、Brinton (2017) があげた基準 (b) 「談話標識は、独立した音の調子がかかることもあれば、前後の語彙と音調が結合されることもある」が示すように、それぞれに独立的韻律がかかり、好まれない応答の場合には、後続する語との結合が改めて科学的に検証することができた。

参考文献

- Bilmes, Jack (1988). "The concept of preference in conversation analysis". *Language in Society* 17 (2): 161-181.
- Brinton, Laurel J (2017). *The Evolution of Pragmatic Markers in English: Pathways of Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chafe, Wallace (1985). "Some Reasons for Hesitating". In: Deborah Tannen and Muriel Saville-Troike (eds.). *Perspectives on Silence*. Norwood NJ: Ablex Publishing Corporation.
- Chomsky, Noam (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. Massachusetts: The MIT Press.
- Clark, Herbert B and Fox Tree, Jean E (2002). "Using *uh* and *um* in spontaneous speaking". *Cognition* 84: 73-111.
- Dörnyei Zoltan and Thurrell, Sarah (1992). *Conversation and Dialogues in Action*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall International.
- Finell, Anne (1989). "Well now and then" (squib). *Journal of Pragmatics* 13: 653-656.
- Fraser, Bruce (1988). "Types of English discourse markers". *Acta Linguistica Hungarica* 38: 19-33.
- Fung, Loretta and Carter, Ronald (2007). "Discourse markers and spoken English: Native and learner use in pedagogic settings". *Applied Linguistics* 28: 410-439.
- Goffman, Erving (1974). *Frame Analysis*. Boston: Northeastern University Press.
- Goffman, Erving (1981). "Radio talk". In Erving Goffman (ed.), *Forms of Talk*: 197-327. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Greenbaum, Sydeny (1969). *Studies in English Adverbial Usage*. London: Longmans.
- Gumperz, John (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heine, Bernd (2013). "On discourse markers: Grammaticalization, pragmaticalization, or something else?". *Linguistics* 51 (6): 1205-1247.
- Heritage, John (2018). "Turn-initial particles in English: The cases of oh and well". In: John Heritage, Marja-Leena Sorjonen (eds.). *Between Turn and Sequence: Turn-initial Particles across Languages*: 149-184. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Jucker, Andreas (1997). "The discourse marker *well* in the history of English". *English Language & Linguistics* 1: 91-110.
- Levinson, Stephen C (1983). *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press. [邦訳: レヴィンソン, ステイーヴン・C (1990) 『英語語用論』 安井稔・奥田夏子訳・研究社]
- 小野寺典子 (2014). 「談話標識の文法化をめぐる議論と『周辺部』という考え方」. 『歴史語用論の世界』: 3-28. 東京: ひつじ書房.
- Owen, Marion (1983). *Apologies and Remedial Interchanges: A Study of Language Use in Social Interaction*. Berlin, New York and Amsterdam: Mouton
- Pomerantz, Anita (1984). "Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes". In: J. Maxwell Atkinson and John Heritage (eds.). *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, Harvey (1987 [1973]). "On the preferences for agreement and contiguity in sequences in conversation". In Graham Button & John. R. Lee (Eds.), *Talk and Social Organisation*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Schegloff, Emanuel A and Sacks, Harvey (1973). "Opening up closings". *Semiotica* 8: 289-327.
- Schegloff, Emanuel A and Lerner, Gene H (2009). "Beginning to respond: Well-prefaced responses to wh-questions". *Research on Language and Social Interaction* 42(2): 91-115.
- Schffirin, Deborah (1985). "Conversational coherence: The role of well". *Language* 61: 640-667.

- Schiffrin, Deborah (1987a). *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schiffrin, Deborah (1987b). "Discovering the context of an utterance". *Linguistics* 25: 11-32.
- Sohn, Sung-Ock S and Kim, Stephanie Hyeri (2014). "The Interplay of Discourse and Prosody at the Left and Right Periphery in Korean: An Analysis of *kuntay* 'but' ". In: Kate Beeching and Ulrich Detges (eds.). *Discourse Functions at the Left and Right Periphery*: 221-249. Leiden: Brill.
- Svartvik, Jan (1980). "*Well* in conversation". In: Sidney Greenbaum, Geoffrey N. Leech, Jan Svartvik (eds.). *Studies in English linguistics for Randolph Quirk*: 167- 177. London: Longman.
- 高田博文・椎名美智・小野寺典子 (2011).『歴史語用論入門』. 東京 : 大修館書店 .
- Takamura, Ryo (2019). "An Approach to Discourse Marker *Well*: Functions and Prosody". MA thesis submitted in Aoyama Gakuin University.
- Traugott, Elizabeth C (1995). "The role of the development of discourse markers in a theory of grammaticalization". Paper presented at ICHL XII, Manchester.
- Traugott, Elizabeth C (2010). "Revisiting subjectification and intersubjectification". In: Kristin Davidse, Lieven Vandelandotte, and Hubert Cuyckens (eds.). *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*. Berlin: Mouton de Gruyter: 29-71.
- Traugott, Elizabeth C [福元広二 (訳)] (2011).「文法化と〈間〉主管化」. 高田博文・椎名美智・小野寺典子 (編著) .『歴史語用論入門』 : 59-70. 東京 : 大修館書店 .
- Wichmann, Anne, Simon-Vandenberg, Anne-Marie and Aijmer, Karin (2010). "How prosody reflects semantic change: A synchronic case study of *of course*". In: Kristin Davidse, Lieven Vandelandotte, and Hubert Cuyckens (eds.). *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*. Berlin: Mouton de Gruyter: 103-154.

謝辞

本研究の一部は、青山学院大学アーリーイーグル研究支援制度の支援によって行われました。ご支援に御礼申し上げます。英語の分析にあたっては、ウンサーシュッツ・ジャンカーラ氏（立正大学）にご教示賜りました。また、草稿段階で忍耐強く指導くださった、小野寺典子氏に御礼申し上げます。